SPOT LIGHT
交流 INTERVIEW

人と地域が交流し大切な場所が増えてゆく

株式会社おてつたび
代表取締役CEO
永岡里菜さん

〝お手伝い〟と〝旅〟を合わせて「おてつたび」。人手不足に悩む地域と旅をしたい若者を結びつけるサービスを立ち上げた永岡里菜さん。知られざるその場所の魅力を知り積極的に関わろうとする〝関係人口〟を増やし、地域も人も元気にしたい！彼女の挑戦は、まだ始まったばかりだ。

「帰りたくない」ほど愛おしい宝物のような時間が私の原点

「子どものころ、夏休みの度に祖父母の住む三重県尾鷲（おわせ）市で過ごした夢のような時間。それが私の原点です」

そう語るのは、〝お手伝い〟と〝旅〟を掛け合わせたサービス『おてつたび』を立ち上げた永岡里菜さん。人手不足に悩む地域と、地方の魅力を感じたい若者をマッチングさせるサービスだ。川釣りや畑仕事の手伝いなど、田舎だからこそ味わえる魅力的な生活を体験してきたことが、今の彼女の仕事に大きな影響を与えている。

「海で遊んだ後、祖父の行きつけのお店に連れられて食べたかき氷の味は忘れられません。祖父母を通じて出会った地域の人たちは皆さん温かく、名古屋の家に帰る時は、いつも『帰りたくない！』と泣いていました」

社会人となり2社目、一次産業をサポートする会社に勤務し、地元の方々と和食の献立を浸透させるために全国各地を飛び回った。その仕事を通じて、実はたくさんの魅力にあふれた場所が日本中のいたるところにあることを知った。

つながっている、
ひろがってゆく、
交流。

隣にいる人と手をつないでみると
その手のぬくもりが
心に優しく伝わるように

「でんき」を通して
くらしや人、
街をつなげていきたい。

私たちはいつも
こうなったらいいな
こうできたら素敵だな
という想いを描いています。

その想いがやがて
現実のものになるように
「でんき」が
過去から、いまへ、つながり
そして、未来へと、
ひろがっていきますように…

CONTENTS

02 交流 INTERVIEW SPOT LIGHT
株式会社おてつたび　代表取締役CEO
永岡里菜さん
人と地域が交流し大切な場所が増えてゆく

06 御菓子の歳時記［秋］

07 甲斐みのり 中部伝統通信
浜松張子（静岡県浜松市）

10 クリス・グレンの産業Impression!
お麩（岐阜県本巣市）

13 ワタナベマキ 今日のごちそうさま
調味料を味方につけて料理はシンプルに、そして楽しく美味しく。

15 エネがお
中部電力パワーグリッド 長野支社 長野営業所 配電運営課

17 でんペディア
鉄塔の役割と形状

19 交流便

20 カンナこと、こんなこと。
ああ、昆虫食！

21 Chuden Press

No.118は12月1日の発行を予定していますが、新型コロナウイルスの影響を考慮し、取材・撮影を一時延期する可能性がございます。これに伴い、発行日の変更等が生じた場合は、随時、交流ホームページ（https://koryu.chuden.co.jp/）やSNS等でお知らせしてまいります。ご理解賜りますようお願い申し上げます。

交流

2020 AUTUMN　No. 117

ホームページならではの情報満載。
ぜひアクセスしてみてください！
詳しくは… 中電　交流　検索

連絡網サービスアプリ
「きずなネット®」の
「交流チャンネル」もチェック！
学校や地域からのさまざまな情報を受け取れるアプリ「きずなネット®」から、「交流」ホームページの更新情報などをお知らせしています。ぜひご利用ください。

「日本の8割くらいは、そんな場所かもしれない。地域の方と交流することでその土地の魅力を知り、初めて足を運んだ場所が自分にとって特別な場所になる経験を重ねました。もっと多くの人にこの幸せを味わってもらえたら、訪れる人も関わる地域もさらに豊かになれるのでは。そう思ったことが今の事業へつながるきっかけでした」

そこからは、ひたすら全国各地を奔走しヒアリングを重ねた。「単なる自己満足ではないのか」という葛藤を抱えながらも、試行錯誤の日々を続けた。次第に仲間が増え、事業の形が整えられていった。

「大都市で就職しなくてもいいかも」学生が目を輝かせて言った

「おてつたび」に参加した若者たちの中には、体験を通して価値観や人生観が変わったという声も。

例えば、宮城県栗原市にサンチュ農家の収穫や地域の祭りなどを手伝いに行った参加者から送られてきたメッセージ。「栗原市は、自分の心の中では旅行ではなく、別の特別なフォルダの中に入っています」「家に帰りたくなかった」…。永岡さんはこれらのメッセージを読み、若者が自分の幼少期の体験と同じようなことを感じてくれていることに感動したという。

「大都市で就職しなくてはいけない、という強迫観念がなくなった学生もいます。経済学部生が『おてつたび』を体験して、就農を視野に入れるようになったり、もっといろいろな地域を知りたいからと、観光の仕事の資格獲得に向けて勉強を始めたケースも。そのように人生の選択肢が広がる素晴らしい体験をしたんだなと」

知らない土地で初めてのことを経験しながら、コミュニケーション能力や自己肯定感を高め、〝自分らしさ〟を見つけていく。そんな若者たちを永岡さんは見守ってきた。彼らの成長を助け、背中を押すことができるのも『おてつだび』の醍醐味のひとつかもしれない。

言語化されると自らの魅力に気づける

変化は、受け入れる側にも生まれる。自分のことは意外とわからないように、地元の良さも外から指摘されてはじめて気づけたりするものだ。

「募集枠1人に対して10人も応募が来たり、当たり前に思っている日常のひとコマが写真に撮られてSNSにアップされると、その地域の人たちは自らが住む場所の魅力に気づくことができるようになる。すると、自分たちでプライドを持って地元をプロモートしたり、積極的に受け入れ体制を整えたり、どんどんいい循環が生まれてくるのです」

参加する側と受け入れる側それぞれが、お互いに得るものがあるWIN-WINの関係でいられること。それが『おてつたび』がうまく機能するポイントだ。

「参加者には、〝お手伝いは結構大変だよ〟と事前にしっかりと伝えます。地域の方には、お客さまとしてではなく〝仲間〟として迎えてほしいとお願いします。遠くから来てくれたということで、おもてなしに力を入れてしまうと疲れて続かない。一方、参加者は役に立ちたいと、やる気満々で来てくれるので、想いにズレが生じてしまうのです」

あらかじめお互いのプロフィールを提示し、期待値の調整をしっかり行うことで「こんなはずじゃなかった」というミスマッチが起こらないように配慮している。

これからもよりよい方向へ進化していく事業のかたち

農家や宿、酒蔵、キャンプ場など、さまざまな場所と若者たちをマッチングさせてきた『おてつたび』。しかし、新型コロナウイルス感染症の問題により、大きな影響を受けている。そんな中でも永岡さんは、常に前向きだ。一次産業と観光業の人材をシェアリングする『おてつたび＋（プラス）』やSNSで宿泊業を盛り上げる『#お宿応援プロジェクト』など新たなサービスを次々と打ち出した。

「こんな時こそ求められること、私たちだからできることをひとつずつ進めています。『#お宿応援プロジェクト』は、皆さんに今まで行った素敵な宿をSNSで紹介してもらう取り組みです。このハッシュタグがあれば、情報発信がしやすくなるはずと思い始めました。このタグを追うと、皆さんが大切に思っている宿の情報が集まっていて、それが素敵な宿を探すガイドにもなっている。こうしてさらに、新たなつながりが生まれると思うとワクワクするね、とスタッフと話しています」

「おてつたび＋（プラス）」（2020年4月リリース）

新型コロナウイルス感染症の影響で人が余ってしまった観光業と人手が欲しい農家など一次産業の事業者を地域内で結びつける新たな取り組み。業界を超えた人材シェアリングを実現した。

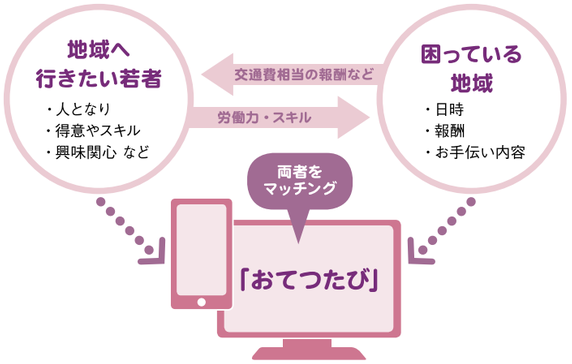
『おてつたび』のサービス立ち上げまで、長野県や富山県をはじめ、さまざまな地域の方々と交流しヒアリングを行った。

#お宿応援プロジェクト
（2020年3月リリース）

オススメの宿への応援コメントを「#お宿応援プロジェクト」のハッシュタグをつけてSNSに投稿するプロジェクト。写真は、毎週定例で開催し宿泊事業者間で情報交換を行う「お宿会議」の様子。

中部地域では、愛知県豊田市（観光）や岐阜県飛騨市（乳製品製造・酒造場・農業）・高山市（農業・旅館業）などで実績あり。写真は『おてつだび』の第一号、長野県山ノ内町の志賀高原の宿。

地域の魅力は そこに住む人を介してこそ伝わる



おてつたび

人手不足に悩む事業者と「知らない土地へ行ってみたい」「仕事をしながら旅したい」若者を結びつけるプラットフォームサービス。登録費・掲載費は無料。マッチングが成立すると事業者は手数料を支払う。参加者は事業者の元で働きながら地域と交流する。地域の魅力発信、若者の知見の広がりの推進を目指している。
https://otetsutabi.com/

永岡里菜 *RINA NAGAOKA*

三重県尾鷲市生まれ。高校卒業までを愛知県名古屋市で過ごす。千葉大学卒業後、イベント企画・制作会社で官公庁や企業のPR、イベントの企画・運営を担当。転職し、農林水産省と和食推進事業を立ち上げる仕事に参画。2018年、人手不足の地域と若者をつなぐ『おてつたび』を起業。さらに、一次産業と観光業の人材をシェアリングする『おてつたび＋（プラス）』などサービスを拡大中。

「おてつたび」という言葉が当たり前になる世界へ

『おてつたび』が目指しているのは、「誰もが居住地や出身地以外に特別な地域をいくつも持つ社会」だ。そこに住む人の顔が浮かぶような自分にとって大切な場所ができると、その地域や人・モノとの関係も変わっていく。すると、都心と地方・高齢者と若者といった価値観の違う者同士の分断が埋まっていくのではと、永岡さんは考えている。

「おかげさまで参加希望者は多く、今は学生が中心です。今後ボランティア休暇が広まれば、社会人にも参加してもらい、その方たちからスキルを提供していただきたいと思っています。また、地方創生が課題となっている海外へも事業を広げていくことも視野に入れています」

自身も〝想い〟を事業化するために、日本中を駆け回り、多くの人に助けられて、一歩一歩前進してきた永岡さん。サービスを軌道に乗せることができたのは、「絶対にこの事業を成功させる！」と強く心に決めていたから。『おてつたび』を社会にしっかり根付かせることができたら、覚悟を持って起業を目指す若者に寄り添い、応援していくような仕事もしたいと今後の夢を教えてくれた。

SWITCH of My Life

魅力がないものはないと教えてくれた父

永岡さんの『魅力がないものはない』という価値観は、営業マンで誰とでも仲良くなってしまうお父さまの影響だ。「子どものころ、友達と仲違いをしてしまった私に『たとえケンカ中でも、自分から相手の良いところを発見できるようになった方がいい』と言ってくれました。どんなモノにも必ずある魅力を自分で見つけられるかどうかが大事だと思うようになった原点です」

「おてつたびに行ってくるね」を標準語にしたい